

## 本居宣長「在京日記」における仮名遣い：歴史的仮名遣いとの相違を中心に

高瀬, 正一  
愛知教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10371>

---

出版情報：文献探究. 31/32, pp. 1-7, 1993-12-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

1 はじめに

本居官長の仮名遣いについては、永山勇氏の、日記や鉢草を分析した詳細な研究がある。<sup>(注1)</sup> それによれば、享保十五年から宝暦二年までの日記や鉢草では、「そのつから」「なを」のように、歴史的仮名遣いと相違する例がみえており、「大略、定家流の仮名遣いによつていた」とされている。この傾向は、その後「在京日記」(宝暦二年—宝暦七年)についても同様であり、「いとおかし」「ゆへ」のような例が多くみられるとのことである。ただし定家仮名遣いに全面的に依拠していたかといえ、そうではなく「さばくさわく」のように両様の表記がみられ、むしろ動揺しているとみるべきものもあるとされている。氏は官長の仮名遣いを

明和初年頃まで、仮名遣いが彼此動揺し、きわめて不安定な語がすくなくあつたことは否定できない

とし、それ以外は

概していえば定家流仮名遣いの系譜につながるものであり、更にいえば、当時の世俗的仮名遣いに従つていたものともと評して大過ないとされている。

ところで、氏も指摘しておられるように、一方において、官長は、ほぼ同時期に仮名遣い書である「かなつかひ」(宝暦元年成稿)を著しているのである。<sup>(注2)</sup> 「かなつかひ」は、官長の著述ではなく、仮名遣い書を抄写したものである。内容は、定家流の仮名遣いに基づいており、「万葉仮名つ可以」と関連があるとされている。「和字大観鈔」からの書き入れもみられる。なお、奥書に「仮字遣者、於我歌道、最可嚴重擇用之也」とあることから、官長の仮名遣い観も窺えるのである。

時代的には、日記の成立以前に「かなつかひ」を著しているわけであり若き日の仮名遣いの典拠となつた可能性は高いと思われる。因みに、永山氏は「かなつかひ」との関連に

ついてはふれておられないようである。

対象としては、「在京日記」の中から漢文体の部分を除いた宝暦六年正月から宝暦七年十月までの箇所とする。本稿の目的は、歴史的仮名遣いとの相違を具体的に明らかにすることにある。そのために、当該箇所から歴史的仮名遣いとの相違例を抜き出す。相違例といっても、それが多数の用例をもつたひろがりのある安定した表記なのか、あるいは少数の用例しかもたないものなのかについて区別する必要がある。また既述のように、「かなつかひ」との関連も考慮する必要がある。例えていえば、現代語の表記において「現代仮名遣い」が拠り所となっているように、官長においても、「かなつかひ」が表記の拠り所となっている可能性もあると思われる。揺れている表記についても、両者が相拮抗して真に揺れているとみなすべきかあるいは、不注意のむしろ誤記ともいうべきものなのかについても検討を試みる。なお、テキストは、「在京日記」については、「本居官長全集」第十六卷(筑摩書房・昭和五十一年)により、「かなつかひ」も「本居官長全集」第五卷(筑摩書房・昭和四十五年)による。なお、本稿では国語の仮名遣いのみを検討し、字音についてはふれない。

2

歴史的仮名遣いとの相違例は、一様にみられるのではなく対応関係が偏っており、その中でも当然ながら、用例数の多寡がみられる。

上段が官長の仮名遣いで、下段が歴史的仮名遣いを示す。用例欄では、異なり語数をあげ、次に具体例をあげる。順番は、用例の多い順にあげ、同数の場合は五十音順とする。同源でも、品詞が相違している場合は別語とみなす。以下の「かなつかひ」の引用において、ルビがある場合、原稿の都合上本文に、括弧付のかたちで組み込む。符号類も原文と相違する部分もある。「在京日記」の表記は、平仮名書きに統一し、適宜漢字を当てる。

Ⅲ			Ⅱ				Ⅰ			
9			8	7	6	5	4	3	2	1
ふーう			ひーい	いーひ	ひーゐ	ゐーひ	ゐーい	いーゐ	はーわ	わーは
9語			3語	2語	1語	1語	1語	3語	6語	7語
かふふる1 まふく(設)1 まふのぼる1	いたふ(痛)1 おもふて(思)1 かふかえ(考)1	まふつ(難)35 さふらふ(候)7 たまふて(給)2	あるひは2 やらひ(矢来)2 さひはひ1	ちいさし4 ひたい1	もちひる(用)2	つゐに2	あさゐ(朝寝)1	まゐる(参)81 しはい1 るすい(留守居)1	かはき1 よはし1 ことはり(理)7 さはく5 さはかし4 あはたし1	かわ(側)28 くわし5 きわ(際)2 あわせ1 かわる1 にきわし(賑)1 ひなわ(火縄)1

Ⅴ				Ⅳ			Ⅲ					
15				14			13	12	11	10		
おーを				をーお			あーえ	へーえ	へーあ	うーふ		
14語				20語			1語	3語	3語	1語		
おさおさし1 おまなし1 おり(折)1	おる(折)2 おかす1 おかしげ1	おし(惜)2 おとこ2 おのこ2 おはり2	おかし44 おとる(難)20 おかむ(押)18 くちおし15	をひたし1 をひをひ1 をよふ1 けをす1	をしつまる1 をす(押)1 をたき(焚火)1 をと1	をこす(遣)2 そのれ2 をこたる1 をこなふ1	そのかしし3 そのつから3 をひはき3 なを3	をく(置)24 をくる6 をそし4 をとる(劣)3	あほうし(烏帽子)1	おほへ(寛)2 みへ(見)1 さへ(寒)1	ゆへ14 うへる(植)2 すへる(据)2	たうとし2

VI					VI		
23	22	21	20	19	18	17	16
みー紐	ひー粘	ほう粘	ろー粘	みー粘	づーず	ずーづ	じーぢ
1語	1語	1語	1語	1語	1語	2語	1語
すあふ(業横) 2	もうす(申) 1	いとう(痛) 13	かるうして 1	まるふと(客人) 1	きつづく(疵付) 1	うすむ(埋) 1 くする(施) 1	しこく(地獄) 1

Ⅰーア段

以外なことに、「1・わーは」が7語、「2・はーわ」が6語と混同例は、割合多数みられる。「1・わーは」では、「かわ」のような一見してあやまりそうもないものが28例もある。尤も、「かは」もみられるがこれについては後述する。「2・はーわ」では、用例数は、さ程多くはない。「かなつかひ」では、「〇は之字わの字の事」とあるもの、「は」については、「某類はなはだおほきが故にさす、暗(そ)にさしるべし」とあって、具体例は記載されていない。このことが、「は」を「わ」と懸る、「かわ」のような例の多さに繋がっているであろうか。因みに、「わ」「に」については、「わ」「に」のようない具体例の記載がみえる。

Ⅱーイ段

「3・いーる」が3語、「4・るーい」が1語と兩者とも語数は、多くない。その中でも「まいる」が11例と圧倒しており、用例数の偏りがみられる。「5・るーひ」と「6・ひーる」は、兩者とも1語ずつである。「7・いーひ」は、2語「8・ひーい」は3語であり、さ程の傾向性は見受けられない。「かなつかひ」では、「〇い之字の事」「〇みの字の事」「〇ひの字の事」として、立項しており、「まいる」「ちいさし」「あるひは」「あさる」が記載されている。

Ⅲーウ段

「9・ふーう」が9語、「10・うーふ」が1語で、「9・ふーう」の方が多く、その中でも「まふ」が、35例と他を圧倒しており、代表的な用例といえる。「かなつかひ」では、「〇う之字の事」「〇ふの字の事」として、立項がある。音綴は「まうづる」「まうのぼる」で、音長とは相違している。なお、「まふ」「まう」「まう」もみられ、「かなつかひ」と一致する例もみられる。これについては、後述する。「9・ふーう」の用例中で、「いたふ」「たまふて」「おもふて」のようにウ音便を「ふ」と表記することについては、「かなつかひ」に「(は)ひふへ」一字の例、此四字にかよふかな也、此かよひに、いうえをかくべからず」として「給(タマフ)」の音綴がある。ただし、形容詞については、「〇いきくうのかよひ之事」の項に、「(く)きい」此假名は、くといふ所をうといひ(中略)ひふのかなをかくべからず、いうをかくなり」とある。「痛」の音綴はないもの音長とは明らかに相違がみられるのである。ただし、詳細は後述するが、「いたう」「もいとう」もみられ、ウ音便を「う」と表記する意識も窺えるのである。

Ⅳーエ段

「11・へーあ」が3語、「12・へーえ」が3語、「13・あーえ」が1語で語数は多くない。ウ段までは、「9・ふーう」と「10・うーふ」のように双方の混同例がみられるが、エ段では一方のみである。このなかでは「ゆへ」の14例が目立つ程度である。「かなつかひ」では、「〇へ之字の事」の項で、「ゆへ」が記載されている。

Ⅴーオ段

「14・をーお」が20語、「15・おーを」が14語で豊富な語数がみえている。歴史的仮名遣いの相違例は、オ段にあるといっても過言ではあるまい。「14・をーお」では、「を

く」が24例と多数の用例があり、「15・おーを」では、「おかし」44例、「おとる」20例「おかむ」18例、「くちおし」15例と安定した用例数がみられる。「をく」は、「おく」もみられるが、これについては後述する。「かなつかひ」では、「〇お之字の事」「〇を之字の事」として立項されており、これらの語の大部分が登載されている。なお、「おとる」については、「不詳」の項目に「ヨドル(オ)」と両用の表記がみえており、言葉とは相違がみられる。

#### VI-四つ仮名

「16・じーぢ」が1語、「17・ずーづ」が2語、「18・づーず」が1語である。用例数から考えれば、四つ仮名は概ね正しく書き分けられているといえよう。「かなつかひ」では、「〇」〇ちすつ之かな之事」として四つ仮名の立項は、あるものの寧ろ歴史的仮名遣いと一致している。「うじむ」「くじむ」「ます」とあって言葉とは相違がみられる。

#### VII-開合

「まろふと」「かろうして」「いとろ」「もうす」と、概して開音を合音表記するものが殆どで、逆は「すあふ」のみである。混同例をみる限り、表音的な表記を用いていることが分かる。「かなつかひ」では、開合単独の立項はないが、前述のように、「〇いきくうのかよひ之事」で、「廣(ヒロ)ひろう、ひろい」「をあげ、さらに「辛(カラ)ともあることから」からうして」が期待されるが、そうはなっておらず相違がみられるのである。

### 3

揺れているものについて、真に揺れているものか、あるいは不注意で誤記したものが区別する必要があろう。不注意とみられるものは、寧ろ安定した表記をとっていたとみなす方が妥当と思われるのである。なお、本節の「在京日記」の引用において原稿の制約上一部原文通りでない箇所がある。

#### 3-1-1-ア段

3-1-1-1「かわ(28)ーかは(2)「

初出は、「北かは」(宝暦6年10月7日)で、すぐに「南かわ」(宝暦6年11月朔日)と「かわ」に変化する。その後「かわ」に定着するが、再び「南かは」(宝暦7年6月18日)が現れる。「かわ」の語自体が出現する約一ヶ月後では、「東かわ」(宝暦7年7月25日)の表記が見られる。以後、一切「かは」は出現しない。揺れとするよりも「かは」を不注意による誤記に見る方が妥当と思われる。それは、「かは」の用例数が僅少なのもちろんであるが、揺れとすれば「南かは」以降二十数例の中に「かは」が全く現れないのは理解に苦しむのである。

#### 3-1-1-2「にきわし(1)ーにきはし(12)「

「にきわし」は、初出の「こよなうにきわしきに」(宝暦6年1月24日)のみで、次では「にきはし」(宝暦6年4月8日)とあり、以後の十数例では、全て「にきはし」で「にきわし」は全く現れていない。言葉の、意識が三ヶ月の間に、「にきはし」を正しいとする方へ傾いたためであろう。最初は、揺れていても後になって安定した表記をとる傾向が窺えるのである。

#### 3-1-1-3「さはく(5)ーさわく(1)「

初出では、「さはき待る」(宝暦6年12月26日)と「さはく」である。ところが、二ヶ月後では、「さわき居る」(宝暦7年2月25日)とあり「さわく」になる。再び「さはきありく」(宝暦7年3月3日)とみえており、「さはく」に戻っている。「さはく」が「さわく」となったのは、初出から二ヶ月の間の空白のために不注意で誤ったものと思われる。それは「さわく」が孤例であり、「一旦」さはく」に戻るとはや「さわく」にならないことから分かるのである。なお、類義語の「さはかし」は全て「さはかし」で揺れがみられないこともこのことを裏付けていよう。

#### 3-1-2-イ段

#### 3-1-2-1「もちひる(2)ーもちある(3)「

フ行上一段活用であるため、「もちある」が正しい。初出は、「用ひられす」と「もちひる」(宝暦6年10月7日)であるが、二ヶ月後では、「もちある」(宝暦6年12月晦日)と「もちある」となっている。ところが、同日の次行では「用ひ」とまた「もちひる」に戻っている。「もちひる」に定着するかと思えば、そうでもなく約七ヶ月後では

「もちぬたれは」(宝暦7年7月25日)と「もちぬる」に復している。近接した箇所において「もちひる」も「もちぬる」とめまぐるしく揺れており、揺れの端的な例とみなせよう。因みに、「かなつかひ」では、「用」(もちぬ・もちゆ・もちぬる)と「ぬ」の方を正しいとしている。この点では、書長の用法は逸脱しているといえる。

3-3・ウ段

3-3-1「まふつ」(35)「まうつ」(一)

初出は、「まうて侍る」(宝暦6年1月24日)と「まう」である。その後暫くは用例はなく、次に出現した場合は「まうつふした」(宝暦6年11月朔日)と「まうつ」である。ところが、一ヶ月後には「まふて侍る」(宝暦6年12月15日)と「まふつ」が現れる。その後、「まうて侍る」(宝暦6年12月26日頃)と「まうつ」に戻るものの、「まふて侍る」「まふつる人」(宝暦7年1月9日)と再び「まふつ」が現れる。その後、「まふつ」で定着するものの、「まうて侍る」(宝暦7年2月8日)とまた「まうつ」が出てくる。同日の表記では、一方で「まふつる人」とあるように「まふつ」もみえている。以後も「まふつ」と「まうつ」が交互に出現しており、安定した表記をとっていない。全体としては「まふつ」の表記をとりつつも、「まうつ」も捨て去っておらず、これも揺れている例として認めてよいと思われる。

3-3-2「かふふる」(1)「かうふる」(1)

用例数が少ないため、果たして揺れていると断定出来るか疑問である。両者は、接近して現れる。「かふふる」は、「かふふらせ給ひ」(宝暦7年7月25日)とあり、「かうふる」は、「かうふりしかさわかこと」(宝暦7年7月28日)とみえている。一例ずつであるが、接近しているので、揺れの例とすべきであろうか。一応、保留としておく。

3-3-3「たうとし」(2)「たふとし」(8)

初出は、「いとたふとく」(宝暦6年1月13日)で、「たふとし」で定着するが突如「いとやむことなかつたうとし」(宝暦7年7月25日)と「たうとし」が現れる。その後「いとたふときこと」(宝暦7年9月13日)と「たふとし」へ戻っている。「たうとし」から約二ヶ月後であるため本来の表記へと復帰したのであろうか。ところが、約一ヶ月後「いとたうとし」(宝暦7年10月4日)と再び「たうとし」が現れる。おまけに、同日の

別の箇所では「いとたふときこと」と「たふとし」の表記もみられるのである。最後は、「すせうにたふとし」(宝暦7年10月5日)と「たふとし」で終わっている。「たふとし」の出現傾向から考えられることは、「たふとし」が正しいとの意識があるものの、数ヶ月程度表記しなければ、いずれが正しいかの認識が薄れ、つい誤った表記をしてしまうようである。これらは、揺れとみるよりも不注意による誤記とみるべきであろう。「かなつかひ」では、「〇ふの字の事」に「たふとし(寛)」とある。

3-4・エ段

3-4-1「みへ」(1)「みえ」(11)

ヤ行下二段活用の運用形であるため、「え」が正しい。初出は、「みへ侍らす」(宝暦6年1月13日)で「みへ」であるが、同日同行では、「見えたり」と「え」である。「みへ」と表記したものの「みえ」にすぐ復帰している。四ヶ月後では「よく見え侍りぬ」と(宝暦6年5月12日)と「みえ」であり、以後終わりまで一貫して「みえ」であり、「みへ」が現れることはない。「みへ」と表記したものの、「みえ」が正しいとの認識があり以後はそれで通じたものと思われる。してみると、初出の「みへ」は不注意による誤記と考えられよう。「かなつかひ」では、「〇ゆえのかよひの事」に「見(みゆる、みえる)」とある。

3-4-2「おほへ」(2)「おほえ」(2)

初出と二例目までは、「むかし寛へて」(宝暦6年1月13日)、「すへて寛へ侍らす」(宝暦6年3月18日)と「おほへ」である。しかし、一ヶ月後では、「寛え侍る」(宝暦6年4月8日)と「おほえ」であり、さらに約一年後でも「うすうす寛え侍る」(宝暦7年3月4日)と「おほえ」である。「おほへ」と表記したものの、「おほえ」が正しいとの認識があるため後で改めたのであろう。したがって「おほへ」は不注意による誤記とみなせよう。「かなつかひ」では、「〇ゆえのかよひの事」に「みえ」ほど明確ではないが「寛(オボユル)」とある。

3-5・オ段

3-5-1「をく」(24)「おく」(2)

初出は、「もよほしをきした」(宝暦6年1月24日)とあり、「をく」である。ところが

が、同日の次の箇所では、全く同一の表記が「もよほしおきし」と「おく」であって、揺れがみられる。しかし、同日のその後の表記では「ぬきをきたる衣裳」と「をく」に戻っている。同日で「をく→おく→をく」とめまぐるしく変化している。以後は「をく」の安定した表記をとっているが、突如「ぬきおきて」（宝暦7年9月1日付は關撰のため不明）と「おく」が現れる。しかし、同日の後の表記では「さためをきしかとも」と「をく」に戻っている。「おく」の用例が少ないことは勿論、同日の表記でもすぐに「をく」に回帰していることから揺れとみるより寧ろ不注意によるものとみる方が妥当であろう。

「かなつかひ」でも、「〇を之字の事」に「をく」(重)「とある。

3-5-2「をひはき」(1)「おひはき」(1)「

初出は、「をひはき」(宝暦6年1月24日)であるが、同日付で「おひはき」も出てくる。用例数の関係上確たることは、いい難いが同日付の兩様表記という点から揺れとみられようか。一応、保留としておきたい。「かなつかひ」では、「〇を之字の事」に「をふ(追)」とある。

3-6・開合

3-6-1「いとう」(13)「いたう」(23)「

兩者ともに安定した用例数がみられるが、数の上では本来の仮名遣いのほうに傾いている。これも、揺れているものに含まれよう。初出は、「いとうかさなりゆく心地して」(宝暦6年1月5日)と「いとう」である。次には「いたうもてなし」と「いたう」でしかも同一の日付である。同日付の次でも同じく「いたう下さま迄」と「いたう」である。「いたう」で定着するかと思えば、「いとうよく成て」(宝暦6年1月9日)と「いとう」に戻っている。しかし、四日後には「いたう半文に心をいれて」(宝暦6年1月13日)と再び「いたう」となっている。「いとう→いたう→いとう→いたう」のようになり、「いとう」と「いたう」の間で揺れており、一方に固定していない。この様な傾向は、後にもあり、「いたうにきはしきよし」(宝暦6年3月6日)と「いたう」であるが、翌日には「いとう風ふき」(宝暦6年3月7日)と「いとう」である。ところが、次では「いたうもてやし侍る」(宝暦6年3月23日)と再び「いたう」となっている。近接した箇所では異なって「いたう→いとう→いたう」と変化しているのである。これら

から考えて揺れている例としてふさわしいものとみなせよう。なお、「9・ふう」でもふれたが、「いたふ」も、「いたふ全盛の枝」(宝暦6年7月7日)と用例がみられる。「いたう」に準ずるものとみられよう。

3-6-2「かろうして」(1)「からうして」(1)「

用例数が少ないため、確実なことがいい難い感がある。初出は、「かろうして」(宝暦6年10月5日)で、あるが約一ヵ月後では「からうして」(宝暦6年11月15日)となっている。割合近接した箇所にも兩表記がみられることから揺れとも考えられるが、保留としておく。

4 まとめ

以上の結果から、歴史的仮名遣いと相違する表記について凡そ次のようなことがいえよう。Aは、歴史的仮名遣いと相違がみられ、かつ五例以上の安定した用例をもつもので五十音順にあげることとする。Bは、若干の揺れはあるが安定した用例数があるもので上段の方が優位にあるもの。Cは、揺れはあるものの上段にあげた歴史的仮名遣いの方が優位にあるもの。Dは、揺れているもの。Eは、用例数が少ないため何れともいい難いものである。

A	(ア段) くわし ことほり (イ段) まいる (ウ段) さみらふ (エ段) ゆへ (オ段) おかし おかむ おとる くちおし をくる
B	(ア段) かわーかは さはくーさわく (オ段) をくーおく
C	(ア段) にきはしーにきわし (ウ段) たふとしーたうとし (エ段) おほえーおほへ みえーみへ

D	E
(イ段) もちあるーもちひる (ウ段) まふつーまうつ (開合) いとうーいたう	(ウ段) かふふるーかうふる (オ段) をひはきーおひはき (開合) かるうしてーからうして

「かなつかひ」との関連については、「からうして」の様に一部相違しているものもあるが概ね関連性が窺えそうである。個々の語についての登載の有無についてはなお吟味が必要であろう。

本稿では歴史的仮名遣いととの相違を中心としたが、それらが定家仮名遣いに基づくか否かについては、なお十分な検討が必要と思われる。以上の二点については今後の課題としたい。

注

- 1 永山勇「定家仮名遣から古典的仮名遣へ」(『文学・語学』44号、昭42・6)
- 2 永山勇「和歌の浦」と「仮名都加比」(『国語と国文学』44巻3号、昭42・3)

〔参照文献〕

- 京極興一「夏目漱石の仮名遣い」(『国語学』160集、平2・3)
- 小松寿夫「江戸時代の国語 江戸語」(東京堂出版・昭60)
- 小松寿夫「江戸語の仮名遣小考」(『築島裕博士還暦記念国語学論集』所収、明治書院・昭61)